ピエール・バルー（歌手、俳優、詩人、作曲家、映像作家、レコード・プロデューサー）
１９６５年　映画監督 クロード・ルルーシュの誘いで映画　『男と女』に出演、劇中主題歌も担当する。製作にあたって資金繰りに苦労したものの映画はカンヌ映画祭でグランプリ、サントラ・アルバムも世界中で大ヒットとなる。この映画で成功した資金を　レコード製作に惜しげもなく注ぎ込み始めるため　１９６６年サラヴァ・レーベルを設立する（これは結果的にフランスで最も古いインディペンデント・レーベルとなった）。それに平行して１９６７年には映画『白い恋人たち』の音楽も担当する。才能がありつつも、表現する機会を得られなかったアーティストたちにチャンスを与えることとなったサラヴァには、国境を越えた多くの才能あるアーティスト達が辿り着き、巣立っていった。当初はメディアやマスコミから無視されたがピエールの情熱によって次第にファンを(世界中に)獲得していく。当時の代表作としては「ブリジット・フォンテーヌ／ラジオのように」(１９７０)、「ピエール・バルー／サ・ヴァ、サ・ヴィアン」(１９７１）があまりにも有名であり、現在もロングセラーを続けている。　80年代から始まる日本音楽シーンとのコラボレイション等もあり、９０年代に入ると新作も次々と制作されるようになっている。そして気がつくと世界中に蒔かれたサラヴァの種子、フィロソフィーに共鳴するものは今なお増え続けている。特に日本では多くの支持者がいることで知られている。

ジャン ＝ ピエール・マス　　９歳の時パブロ・カザレス（Pablo Casals）に出会って話を聞いたことが、のちの人生を決めたという。１０歳から生まれた町のダンスホールでピアニストとしてプロデビュー。小中高の間、毎週末ノンストップ演奏して現場の感覚を手にする。２０歳でパリに上京。１９７４年にブラジルの著名なベーシスト、セザリウス・アルビン（Cerasius Alvin）と出会ったことが、パリでの成功につながる、Owl　records からデビューアルバム、そしてポリドールから Mas /Alvin、以後多くのジャズのレコードに参加する。しかしあまりに若いうちからステージをこなしていたせいか、彼の興味は作曲に集中するようになっていった。１９７４年から始めた映画音楽の作曲は今でも彼のおもな活動となっている。尊敬しているのはバーナード・ヘルマン（ヒッチコックの映画音楽で有名）、監督が、音楽はいらない。というシーンに絶妙の音楽を入れて「そうなんだ、そんな音を入れたかったんだ」と言わせるのが醍醐味だという。一方、ミュージシャンとしても自分のリズムでセレクトされたパートナー達と、極上のアルバムを作り続ける。歌の伴奏は一切しないが、ピエール・バルーとのコラボレーションだけは大切な時間として取ってあるそうだ。最新作はサラヴァ　レーベルから Waiting for the moon。

ヤヒロ　トモヒロ　　少年時代をスペイン領カナリア諸島で過ごし、地元でドラム・パーカッションを始める。１９７９年帰国、１９８０年日本でプロ・デビューする。　日本のジャズ界を代表する山下洋輔、向井滋春、渡辺香津美、板橋文夫、梅津和時、などと活発な活動を展開する一方、１９８０年代には、伝説のアフロファンクバンド「じゃがたら」や「エスケン＆ホットボンボンズ」のレギュラーメンバーを務めた。また、久石譲、加藤登紀子、さだまさし、大貫妙子、吉田美奈子、阿川泰子、等多くのレコーディングやツアーに参加、インターナショナルな感性と確かでしなやかな音楽性は多くのアーティストに愛され、ジャズ、ロック，ポップスなど、ジャンルの枠を超えた幅広いフィールドで活躍する。海外アーティストとの交流も深く、ウーゴ･ファトルーソ、ジョアン･ドナート、ピエール･バルー、ジョイス、トニーニョ・オルタ、ホルヘ･クンボ、など南米の本格的アーティストとの共演やツアーを行い、話題となる。近年では、ソロパフォーマンスも意欲的に活動を開始し、ライブ･国内ツアーを展開、海外のパーカッション・フェスティバルにも参加する。現在のレギュラー活動は、2004 年より毎年日本、ヨーロッパツアーを実施する日亜混成バンド GAIA CUATRO、坂田明 YOSHI!、「室内楽団 八向山」、スピック＆スパン、ネルビオ、鬼武みゆきトリオ、Os Amarelos などの他に、Hugo Fattoruso、中村善郎、タイロン橋本との Duo 等国内外で活躍中。

井野信義　　'79年、ドイツのメールス・ジャズ・フェスティヴァルに出演し海外でも高い評価を得る。24歳のとき日野元彦と出会い、リズムセクションとして多くのジャズメンと共演。'80年、初リーダー・アルバム「マウンテン」

を発表。'83年よりヨーロッパ・ツアーが頻繁になり、ヨーロッパにおけるほとんどのジャズ・フェスティヴァルに出演。現在は、板橋文雄グループ、斉藤徹duo、またsolo演奏と精力的な活動を展開。

マイア・バルー　父“ピエールバルー”のもと、幼少時よりステージが遊び場という環境で過ごした生粋の“アーティスト”。ブラジル滞在中にフルートを始め、18歳の頃には戸川昌子がオーナーの店「青い部屋」で、ネオちんどん〈かぼちゃ商会〉と出会いサックスを担当。以後は〈ちんどんブラス金魚〉のメンバーとしてサックスとフルートを演奏、作曲と編曲も手がける。2004年にソプラノ歌手、深川和美と〈かずみとまや〉のユニット名で1stアルバム『アミチエ』を発表。役者としてもチリ系フランス人劇団『アレフ』の一員として活動している。2005年より『CABARET SHINJUKU』（日本の個性派ミュージシャンをフランスに紹介し日仏音楽の橋渡しをするイベント）のプロデューサーを務め、参加アーティスが集合した本作“KUSAMAKURA”をプロデュース、フランス、カナダで発売中。世界中のアーティストと交流を持ち、無国籍でパワフルな音楽性と直感を武器に表現手段を広げ、2007年からは本格的にソロ活動をスタートさせている